

文人・中村哲先生の教え

東, 喜望

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

31

(開始ページ / Start Page)

272

(終了ページ / End Page)

274

(発行年 / Year)

2004-08-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002838>

文人・中村哲先生の教え

東 喜望（白梅学園短期大学名誉教授）

ぼくらが学生の頃、校門を入ると右手に四階建ての洋館があった。新館という。一階が大内先生の総長室。二階は理事の部屋だったが、最上階は教室で、ぼくらはここでゼミを行った。「経営陣の頭上でゼミをやるのも愉快ですな」と冗談をいながら主任教授は必ずドアを閉めさせた。官憲が構内に潜入しているという噂があったからだ。五〇年代前半のことである。

そんな張りつめた教室も大学祭になると一転した。美術部の華やかな画廊に変身するからである。中村先生の油絵が数点かけられていて、毎年、先生のどこかオリエント風の明るい作品を拜見してのち岡本太郎の講演を聴いた。眼を輝かせ、いわゆる八の字文化を厳しく批判していた。思えば、憲法学者としてつとに著名であられた中村哲先生が画家であったのを初めて知ったのも、あの懐かしい「画廊」に於いてである。

一九七二年、沖縄文化研究所が創設され、先生がたのご推挙を得て研究員となり、高藤武馬先生辞任ののち、所員（兼任・兼任）をつめさせていただいた。当初は月例研究会も開かれ、総長という重責にありながら中村先生はよく麻布まで足を運んでくださった。当時私は近世琉球誌の整理にかかっている、桂川甫周の弟・森島中良や大田南畝など近世文人と琉球との関係について二回ほど報告させていただいた。文献資料に基づく実証的な報告であったので、さぞ退屈されたにちがいない。先生は「辞書の学はやらぬ方がよい」と忠告された。そして、「明治人最後の文人は、ぼくだ」とも語られた。今にして思えば誠に至言である。

その後、研究所の活動をとおして多大なお教えを戴き、殊にアジアに関する私の無知を拓いてくださったのも先生である。中国の回族、客家や蛋民、社稷や分類械闘のことなどがその一端である。忘れがたいのは一九九〇年、中国調査に同行させていただいた時のことである。一月三〇日、私たちは福州閩江を馬尾の羅星塔まで船で下った。途中の中洲で貝をとっていた婦人を見ながら先生は、隣席の安江孝司先生と私に海女の日本への渡来について懇々と語られた。濟州島を経て志摩へ至る道のりに思いをはせておられたようであるが、この時、私は先生が日本古代国家の形成に関し壮大な構想をたてておられることを初めて知った。同月二四日夜の福建師範大学との交流会で、先生が陳教授に白水族（水上生活者）のルーツについて熱心に質問していたのもこのことに関連していたにちがいない。

同年七月一七日夜、ドイツ大使館から急ぎかけつけられて、講演をされたことがある。かつて日本では、食いつめた遊女が四国遍路か熊野参詣の途路で果てることをよしとしたと語られ、沖縄の遊女に関する研究が少ないと批判された。或いは四国や熊野を沖縄の奥武島と同じ世界（後生）としてとらえていたのかも知れない。

先生はまた、よく「神武東征の八咫鳥や熊野の群鳥、あれはカラスではなくてトキだよ」ともいわれた。ご自身で鳥類飛来の資料を求めて調べたこともあるという。東西古今にわたりご造詣の深い先生のご指摘は、正鵠を射ていると思われるが、その歴史的意味を聞けなかったのは誠に残念である。

九八年一月三日、数名の所員の皆さんと共に先生を訪ねた。戦時中、官憲の目を巧みにかわしながら柳宗悦を台湾各地へ案内した思い出などを語られた。奥様が『白樺』の同人であった関係で、柳は渡台したという。先生にお目にかかったのはこの日が最後であった。

先生は戦後、一貫して平和と民主主義を推進するためにご尽力なされ、その指導的な役割を果たされた学者だと思ふ。そんな先生のご逝去に会い、大きな支えを失ったようで心がいたむ。けれども、どんなに微力でも心ある人々が力を合わせて先生の学統を受けつぎ、時流に阿ることなき、かの「文人精神」を広げてゆくのがぼくらに課された任

務ではないかと思えてならない。不況に加え、改憲のきざしさえ見える今日にあって、このことを私は痛感している。

中村先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。合掌。